
彼と私の生き着く道

水仙 嘉音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と私の生き着く道

【Nコード】

N3878D

【作者名】

水仙 嘉音

【あらすじ】

闇と言葉を交わし続ける人間の『私』と、人の心に棲み続ける闇である『彼』の世界【全20話】

獣心1（前書き）

己を失った『私』が動いた時、『彼』もまた動き始めた。
（※一部残虐要素あり。苦手な方はご注意）

獣心 1

私は、獣であろうと思う。
獣は自由であるのだから。

私は、ベッドから起き上がり天井を見つめた。
なにかあるわけでもない。
だが、私はカーテンを開けて日差しを浴びる気にはなれなかった。

太陽を見るとなにかを壊したい衝動に駆られる。
別にそれに対して抵抗をしている訳ではない。
ないけれども、私は破壊よりも欲しているものがある。

「……死、か……」

あからさまな言葉が私の唇を沿って這い出た。

それが私の言葉なのかさえ、危うい。

私の中の何かがそう言ったのだから。

軋むベッドに身を預けた私は暫く天井を眺めていた。

だが、すぐに満たされる事のない気持ちを何かで紛らわそうと再び起き上がる。

すると、窓の外から聞こえて来る声に気づいた。

耳をすませると僅かに弱々しい声が聞こえる。

仕方なくカーテンを開け、確認する事にした。

そこにいたのは、小さな猫だった。

すすり泣くような声で私を呼ぶ小猫。

私はドアを開けて、外へと足を運んだ。

朝だというのに、日差しが異様に強いように感じる。

猫は、私を見上げて鳴いた。

私は、目を細めて見ていた。

そこからは、よく覚えていない。

弱々しい鼓動にふと我に返った時には、もう遅かった。

手元で震える猫は血だらけで、ああ自分がやったのか、となんとなくわかった。

でも、現実味がこれっぽっちもなくて。

だから、私には慈悲の心も後悔の気持ちもなかった。

血に濡れた掌を開くと猫がまた鳴いた。

その鳴き声が、動くその体が、未だ鼓動するその心臓が――――。

「邪魔……」

私は自分でも驚くほどに一切躊躇う事なく猫の腹を裂いた。
びくりと震え、数秒ほど小さく痙攣していた猫はやがて動かなくな

った。

動かない猫を見た私は、初めてそこで満たされた気分になった。そして、こうも簡単に命を奪えるのかとあっけなさを感じた。亡骸を道路に投げ捨てた私はまた家に入った。

不意に見ると服も血で汚れている。服を脱ぎ捨てて手を洗った。私の指を伝って流れ落ちていく血を見て口元に笑みが出た。視線を上げると鏡に私が映っていた。

そこには、人間の『私』ではなく、理性を失った『私』がいた。ふと、物足りなくなった。

猫。しかも小さな猫の血だけで満たされてくれるような感情ではない。

もっと、何か。もっと、もっと欲しいと思う。

鏡から顔を背けて廊下に出た。

点々と続く赤いシミは猫の血だろうか。

拭く気にもなれなくて、自室のベッドに倒れこんだ。

猫が邪魔だから消した。

一体何が悪い、悪いものか。

カーテンを閉め切った部屋は、夏だというのに少しひんやりしていた。

シャツを手繰り寄せて着る。

無造作に広がったシーツを撫でて目を閉じた。

唇を噛めば口内に広がる血の味。

それに僅かに満足する自分がいるのも確かだ。

私は不思議な感覚に囚われた。

まるで自分の中に違う何かがいるような気分だ。

有り得ないと頭を振る事はしない。

どうせそうなのだ。きつとそうなのだ。

私は静かにまた目を閉じ、そして眠りに落ちる。

そこに獣がいた、ひどく汚れていて血に飢えた獣。

切り裂かれた箇所からは臓器がはみ出していて、

焼かれた所は黒くなり皮膚が千切れかかっていた。

赤い瞳は、なにも映さない。

ただ、真紅に染まったその眼球は宙に視線を投げ出していた。

獣は、求めるだけだった。

血を欲し、肉を引き裂き骨を砕くことを望んで

ただ『死』というものに固執していた。

生きることさえ、望むことはなく

時には、『生』と『死』の境を歩き

ただ欲するがまま、己が力を解放して来た。

それが、生きるということなのだろうと

それが、生き残るということなのだろうと

自分の『心』に言い聞かせて、ただ欲するがままに

ただ濡れた血の感覚に、砕いた骨の音に、乾いた心臓に

———………酔いしれることのみを生きているという実感に
置き換えて

獣心 2

獣は、『死』を欲する。

それが、何であるかも理解せずに……………。

不意に目が覚めてしまった。眠りが唐突に終わりを告げて、私はまた光のない現実を見る。

起き上がれば外は既に暗かった。

時間が流れて夜になった。

ただそれだけのことが妙に嬉しくて、私の足は自然とドアに向かっていった。

外に出ると、漆黒の闇が辺りを包んでいた。

折角の街灯も満足に光を放たない。

そんな中、私は歩き出した。

何処に向かうでもない。

ただ、何処かに行きたくなっていた。

不意に手を見つめる。

白い手は漆黒の中でもハッキリと浮かび上がっていて、それに奇妙な腹立たしさを感じた。

どす黒い感情が私の胸の奥で音を立てながら渦巻くのが分かる。

そこで思った。

今日は、どうしてこんなに暗いのだろうか。

いつもは明かりがちよこちよこと点いているのに、今日はない。そう、今日に限って。

「どうして……」

私の呟きは闇に飲み込まれていった。

勿論、誰も答えない。

私を包んでいるのは静寂で周囲には沈黙が溢れている。

だというのに、一人ではない気がした。

まるで隣に――否、自分の中に『誰か』がいるような感じさえする。

「……誰か、いるの」

私の問いは届かない。

当たり前だ。当然じゃないか。

周りに『人』がいないのだからそんな当然だ。

だけど、返事が返ってきたような気がした。

私は、一人満足してまた歩き出した。

何処に向かうのか、そんな事は私が聞きたいくらいだ。

「何処に……」

言いかけて止まる。

聞こえた。

今、確かに声が聞こえた。

冷たい汗が頬を伝っていく。

怖いわけではない。ただ何かがわからない以上、不安になるのは当然のことだ。

「誰……?」

問いかけてみた。

答えはない。今度は一切何の声もしない。

私は歩いていった。

何処に行くのかも分からず、ただ歩かされていた。

と、不意に人影を見つけた。

若い女が、前から歩いて来て私の隣を通り過ぎようとした。

気づけば私は女の腕を掴んでいた。

女が訝しげに私に視線をやり、目を細める。

視線が私に向いたこと。女の目が私を見たこと。

そんな事が、きっかけのように私の身体を震わせた。

細い腕を強く握り締めて引き寄せ、驚く女の白い首に手を掛けた。

苦しそうにもがいた女の口から言葉にならない言葉の欠片が漏れる。

私は――私は、何も見なかった。ただそっと力を込めた。

白い肌に爪が食い込んで、徐々に血が滲んでいく。
なんて簡単な動作だろう。

「……………あっ」

私が小さな声を上げて手を離すと、女はその場に崩れるように倒れた。

女を見下ろした私は低く舌打ちをした。

胸糞悪い。そんな言葉が一番似合う気分だった。

女の呼吸はまだある。辛うじて

心臓だって、まだ脈を打っている。

つまり、そう、つまりこういう事だ。

この女はまだ生きている。

「どうして…………」

私は自分に問い掛けるように声を出すと同時に焦りを消すように女に背を向けた。

「出来ないよ…………人を殺すなんて」

できない。

出来ない。

やってはいけない。

してはいけない、はず。

闇の中で、私は一人ぶつぶつと呟いた。

声は聞こえない。何も答えない。何一つ言ってくれない。

脚が急に不安定になった時、私は疲労が溜まっていたのだと自覚した。

歩調が自然に早まっていく。

顔が引き攣る。

「……………違う。違う違う違う…………人と、動物を殺すのは、違う」

怖い。怖い怖い怖い。

どうしてあんな事をしてしまったのかがわからない。

人間を殺す事は、動物を殺す事とは違う。

違うはずなのにどうして手が出てしまった分らない。

『何が違う……？』

「…………ッ！」

唐突に聞こえて来た声。私は慌てて振り返った。見える場所には誰の姿もない。だが、声は聞こえた。ぞくりと背筋が震え、ひんやりとした汗が流れた。私は走り出した。

闇の中、今までとは違う何かを感じたから。

そんな私の背中に言葉が投げ掛けられた。

『……同じ事だ』

一体どれくらい走ったのか。自分でもわからない。

ただ、気付けば周りは闇だけになっていた。

さっきとは違う。黒々とした本当の暗黒。

完璧なまでの闇。

愛しい愛しい、そして恐ろしい闇。

「……ふっ」

走っているのか歩いているのか止まっているのかも分からない。

私は、目を見開いて笑った。

口が裂けるかと思うほどに広がって、私のものじゃないような声が上がった。

「ふ、ふっ……あ、は、はははッ！」

私は空を見上げて笑った。

声を張り上げて。

黒いんだ。

何もかも。

この目に見えるもの全てが黒一色なんだ。

同じなのだ、皆、黒。

周りは、黒。

漆黒の闇、命の光を忘れた闇。

一面、黒で染まっでいて。

光なんてものは存在しない。

そんなものは存在を許されていない。

私は大地に跪いた

何をするでもなく、笑う。

下劣な声が私の唇を這って出てくる。

口が限界まで開いて声が響く。

不意に笑いが止まった。

喉が渴いた事に気付いた時には口の中に鉄の味が広がっていた。

唾を飲み込むと、喉がひりひりと焼ける。

どうして笑ったのか、自分でもわからない。

気持ちが悪かった。気分が悪かった。

喉元を駆け上がってきた異物を口から吐き出すと、べっとりとした

液体が足元に広がった。

「……あ、か……赤い……」

掠れた声で呟くと笑みが浮かんできた。

黒い黒い漆黒の闇を彩る真っ赤な真っ赤な鮮血。

その真紅の液体の中に溢れる生きていた印。

肉を裂いて引き抜くと出て来たのも確か赤い赤い血。

空気が洩れるように鼻から外へ出て、次に笑いが漏れてきた。

口元を舐めると血の味が広がっている。

私の中に別の何かがある。

その何かが動いている。

確かなものなど何もないのに、そう感じた。

しばらくして、私は意識を取り戻した。

何時から気絶していたのかさえわからない。

ただ気付けば時間が経っていただけのこと。

それだけの事なのに。

何故か、不思議な感覚が私に残っていた。

闇に抱かれているような。誰かに支えられているような。

異質な感覚に私はしばらく身を任せていた。

心地よい闇の感覚にまた目を閉じる。

獣が吼える

吼える

吼える

哀しげに

楽しげに

獣は吼える

獣心3

”奴”はまるで狂ったかのように延々と笑い続けていた。そして、とうとう溜まっていた血を吐き捨てた。

やはり狂っているのだろう。それでも奴は笑い続けていた。

”俺”の声には全く気付かない。

いや、気付かない振りをしているだけか？

どちらであつたところで同じ事。

奴は俺の事を感じていても知ってはいない。

脆く壊れてしまいそうな奴の魂を強く抱きしめた。壊れてしまわないように。

周りの誰もが、自分たちの育った家庭で暮らしているというのにこいつは独りで此処にいる。

だが、そんな表の事情は、他の誰かにとっては哀れみを催す原因になりえても、俺がそれを感じる原因にはなりえなかった。

今までは。いや、今ですら。

もっと酷い現実を俺は知っている。

では、何が俺の感情を揺さぶつたのか。

奴の強さと脆さの振幅の激しさが、俺の感情に影響を与えたのだろうか。

選ばれたがために他の誰とも違う運命を歩まなければならなくなつた。

その事にも、哀れを催す事がない訳ではなかったが——ともあれ、

”俺”に選ばれるのは奴でしかなかった。

そんな事に気づいているのか、気づいていないのか。

奴は、強く抱き締めた俺の腕の中で、諦めにも似た溜息をついてそ

の身の緊張を解いた。

人が壊れてゆくのを見ていた。
この俺の腕の中で。

今までの誰より奴は心地よい。

多くの人間が俺の前で壊れていった。

泣き叫んで苦しみに喘いで。

奴の中に棲んでいる俺が何をしようというのか。

何もわからないのだろうか、奴が俺を感じているというのは確かだ。

奴は、俺を見ていても見えていない。

俺は闇。異質なのは奴、闇を彩るのは赤ではない。

闇を彩るのは残虐な魂の鮮血でしかない。

それも生き血であれば尚良い。

さあ、俺のために裂いてくれ。

人間の肉を引き裂いて

溢れんばかりの血を手を受け止めて

骨を砕き、それをもって肉を刺し

生きている事自体が苦痛だと思えない激痛を

死ぬ事すら出来ない化け物の絶叫を

全て、俺に捧げてくれ。

闇の生贄をその血で美しく染め上げて

声が枯れ切れるまで響かせて

脈打つ心臓に刃を埋め込んで

”最高の作品”に仕立て上げてくれ。

すべては俺のために。

すべては俺のために。

すべては俺のために。

お前は、もう俺の中に囚われたのだから。

お前は、俺で俺は俺。

お前は、俺の一部なんだから。

溺れていけ、俺の中に。

その心に刻みつけてやる。

俺の所有物としての爪痕を。

死ぬことも出来ない化け物の絶叫を

すべて、俺に捧げてくれ。

闇の生贄をその血で美しく染め上げて

その声を枯れ切れるまで響かせて

脈打つ心臓に刃を埋め込んで

最高の作品に仕立て上げてくれ。

すべては俺のために。

すべては俺のために。

すべては俺のために。

お前は、もう俺の中に囚われたのだから。

お前は、俺で俺は俺。

お前は、俺の一部なんだから。

溺れていけ、俺の中に。

その心に刻みつけてやる。

俺の所有物としての爪痕を。

死ぬまで俺と共に。

人形として騙され続けるがいい。

そろそろ帰してやるか。
死んでもらっちゃ困るんだから。

だから、俺は奴を解放する。

否、一時的な”休息”を与える。

同時に俺はまた沈む。奴の心の奥底に。

俺はいる。

奴の心の中に――奴の”中”に棲んでいるのだから。

逃がさない。何があっても逃さない。

死を待つ孤独な人形よ

血を纏って鼓動を消すが如く舞い続けるがいい。

終わる事のないステップから逃れる術を持たない哀れな人形よ。

死霊を連れてただ舞えばいい。

『死』という名の最高のダンスを己が放つ血で染め上げるまで。

俺が開放してやれば、奴は当然意識を戻した。

家に帰って寝るために。

どうか俺の住処を壊すなよ？

俺の闇は光に隠れる。

だが、光は闇に支配されるが闇は光に支配されない。
光が照らしきれない漆黒の感情が人間の中にある限り。

獣心 4

欲するものは、時として手に入る事なく消え去るもので

愛にも似た狂乱的な感情は留まる事なく欲するための欲望そのものであり

似つかぬ闇と光の対照的な存在意義。

全ては、混同される漆黒さと統一されゆく純粹さと同義である。

気付いた時、私は家の前に立っていた。
此処までどうやって帰ってきたのかなど少しも覚えていない。

ただ、今此処にいるという事だけは確かな事で、私はドアを開けた。放置していたせいか少し湿気がある空気に気分の悪さを覚えた。

ドアを後ろ手に閉めて、窓に近づく。

外は未だ暗いのにそれでも私の周りは薄明るい。

窓の向こうから救急車の音と光が届いた。

そういえばあの女はどうしたのだろうという考えが脳裏によぎる。

知った事ではない――いや、気になったのは人間としての性？

私はカーテンを閉めて顔を背けた。部屋の中に光を発するものはない。

暫くの間は、ぼんやりとベッドに寝そべっていた。

しんとした室内、誰もいない空間なのに。

私は、そこに誰かがいるのを確信した。

確かにいるのに見えない。

寝返りを打っても背中に視線が突き刺さる。

まるで、誰かに見られているような、露骨に言えば監視されている気分。

鬱陶しい。

ざわめく気持ちを抑え、目を閉じた。

重い瞼はすぐに瞳を覆い隠し、私を睡魔に引き渡した。

今度は空腹を訴えている腹が煩い。

くるくると回るような胃を締め付ける作用が邪魔だ。

仕方がない。とにかく立ち上がって部屋を出た。

キッチンに行けば何かあるだろう。

引き出しを開けた私は舌打ちをした。

何もないなら寝るしかない。

そう思って顔を上げたと同時に威圧感を感じた。

外と同じで、同じなのに何か違う。

でも、何が違うのかは何もわからない。

蛇口を捻って水を出す。

止めどなく溢れて消える水を見て溜息が漏れた。

何かと似ている。だが、何かはわからない。

ただ、そう感じたただけなのだから。

「……ああ、そうか……」

私は目を細めた。

血と似ているんだ、傷口から溢れて肉を裂いて出て来る血に。

私は淡い笑みを浮かべた。

ただ何もなく流れる水を凝視して。

気分が墮落していく。

私は水を止めて背を伸ばした。

キッチンには何もない。

冷蔵庫を開けて、中にあった牛乳を出してコップに注ぎ、手に取って飲み干す。

でも、それでも気持ちは終わらない。

コップを洗い場に置いて廊下に出た。

自分の足音さえ気になる。

耳に届くすべてが異質に感じる。

視線を上げると水槽が目に入った。

玄関に向いて置いてある水槽。

昔は何かがいたんだっけ。

そう思って立ち止まる。

水槽の水は青く揺れていて。

その中に映り込む姿は私だけ。

部屋に入ってドアを閉める。

この家には、私以外誰もいないのにこれが習慣になっている。

足元に何かが当たった。

それを抱き上げると小さく鳴いた。

「あれ……いたの……」

あの猫の子供。

いたのかさえも忘れていた。

「どうした……」

私が笑いかけると子猫は鳴いた。
まるで何かを求めるように。

「…ああ、何も、あげてなかったね……」

私が言っていると子猫はまた鳴いた。

鳴いても何も変わらないのに。

鳴いても何も出来ないくせに。

「欲しいか……なにか……」

問い掛けてみた。

子猫は、腕の中で私を見上げた。

白い毛を撫でると気持ちよさげにまた鳴いた。

「ああ……お前のお母さん……」

子猫はまた鳴いた。

「いないよ……もう、いないんだよ」

私が言っていると子猫はまた鳴いて腕の中から逃げるように下に降りた。

そして、私の前でちょこんと座り、見上げて来る。

「何……？」

私はただ返した。

沈黙が流れて、子猫が鳴いていない事に気付いたのはいつだろうか。
気付けばいなかった。

いなくなっていたんだ、私の前から。
覚えていない。

私は何もしていない、覚えていないんだから。

獣とはなにか

誰が知り得よう？

誰がそれを理解できよう？

獣のことなんか

誰もわからないんだから

そう、誰にも

理解なんか出来ない

それが獣なんだから

獣心5

わかり得ない物体を

理解など到底し得ない出来事を

人は直視する事などできるのだろうか

奴はまたやりやがった。

俺が薦めた女は殺さなかったくせに、どうしてだか猫はさっさと殺しやがる。

全くわかんねえ奴だ。俺は、ようやく奴の前に出た。

でも、奴は気付かなかった。

——なんだ、面白くねえの。

俺は足元に転がってる”それ”を拾い上げた。

もう冷たくなった”それ”は、黒くなってしまった血の上に唯一形を成すもの。

何してんだよ。

俺の言葉は奴にはまだ届かない。

仕方なく、俺はその小さな猫を取り込んだ。

既に生命の光を失ったそれは易々と俺の中に入り込んだ。

感情さえも支配されて奴はどうしたいんだか。

無機質で無感情な奴。

お前って、本当に思い通りにならない人形だよな。

耳でそう囁いてみれば、奴はまた瞳に光を灯した。

どうせなら人間を殺せばいいのにな。

その声は届いたのか、何かに遮られたのか。

奴は啞然と足元を見ていた。

平然としているのも奴だからなのか。

俺はまた溶け込んだ。

奴と一体化する為、闇の中に。

飛び散る血の中。

お前は どうするか……。

私が気付いた頃には、もういなかった。

だから、私には関係ない。でも、何かが気になるのは確かなことで。それもあの猫を私が飼っていたからこそその気持ちで。

周りの空気が淀んでいた。

まるで闇が一線を越えたように。

「……誰……？」

私が問い掛けてもそれは何も答えない。

何も言わずに、ただそこにいる。

「答えたらどうなの……」

でも、私の前に姿を見せる事はない。

私の中にいるのか、それとも私の周りにいるのか。

それさえ、今は分からない。

「……人形」

私の唇が自然と紡いだ言葉。

何故だか、何となく意味がわかった。

それは自分なのだという感覚が何処かにあったから。
私はまた笑みを浮かべた。

「出て来なよ……わかってるから」

私の声が部屋中に大きく木霊した。

何度でも言っでやるよ。出て来ないつもりなら。

どんなに大声でも出して。叫んで、喚いて。

「わかってる……ねえ、出てきなくて……」

奴は一体誰に話し掛けてんだ？

俺か？ 見えもしないくせにか？

頭おかしいんじゃないの？

俺は息を殺して奴を見ていた。

気付かれる筈などないのに。

『見えないのに……？』

俺は問い掛けてみた。

果たして今度はそれが聞こえているのか。

奴は虚ろな瞳を俺に向けた。

俺が見えているのか？

『見えるのかよ……？』

また問い掛けた。

だが、奴は俺から目を逸らして下を見た。

一体何のつもりなんだか。

俺が見えていないのなら呼びかけるなよ。

いや、壊れたか？

「いるんだね。そこに……」

今、確かに”聞こえた”から。

足元の黒ずんだシミは、きつと子猫の血なんだ。

そう思った。そして、そんな事をしたのはきつと私。
全く覚えていないのに。

「出てきなよ……私の前にさ……」

問い掛けて。

闇がまた動いた。

まるで笑うかのように。

『ずっと此処にいるだろうが』

答えた後に思った。

俺は闇だというのに、どうやって人間の瞳に映る事ができるのだろう？

「そこなんだ……」

呟いて。私は”それ”と向き合う形になった。

触れる事なんかしない。

私はきつとそれには触れられない。

だから、そこに存在しているそれが感覚として伝わるんだと思う。

奴は俺を見た。場所なんかわからない筈なのに。

俺も”奴”を見据えた。

否、捕らえられたのは俺かもしれない。

ただその場の空気が淀むのは、俺だけのせいではないのは明白だ。
お前が、お前の存在がもしかしたら……――――。

獣心6

「お父さん？お母さん？」

一人の少女がリビングのドアから顔を出した。

しかし、両親は少女に気付く事もなく口論を続ける。

そんな事はいつもの事。口論している二人もいつもの光景で、全てがいつもの話。

少女は、止めるでもなく怯えるでもなく。ただ黙ってドアを閉めた。廊下を歩いて、自室に入って、それからようやく声を押し殺して泣いた。

しばらく泣き続けた後、腫れた目で床を睨みつけながらベッドの上で膝を抱えた。

まだ両親の声が届く。響く怒声に少女は耳を塞いだ。

「うるさいよ……」

鳴り止まない耳鳴りのように響く両親の声。

何かが倒れる音。

そして、何かの割れる音。壁が大きな音を立てた。

続いたのは何かに踏みつけられた床の大きな悲鳴。

「うるさい、うるさい、うるさい……うるさいッ！」

少女は叫びながら立ち上がった。

そして、勢いよくドアを開け放った――……。

「……?」

少女は唐突に我に返って声を上げた。

眼前に広がる光景は、まるでドラマに出て来るワンシーンのようで、全く現実味がなかった。

家に黄色いテープが巻かれて、警察らしい人達が大勢そのあたりに立っていた。

その中から、少女の母親が何かに乗せられて運ばれていく。

「……?」

警察の者だという人物が少女の前に屈み込み、名前を呼んで手を差し出した。

少女は素直にその手を取って歩き出した。

振り返ると父親が何やら話を聞かれている。

だが、その声は「覚えていない」と繰り返すばかりで何も進まな

い。

少女は黙って前を見た。

警察だと言ったその男は彼女を車に乗せて言った。

「お母さんがどうしたか、知らないかい？」

少女は黙って首を振った。

様子を見ていた彼らは少女のそれがショック故の症状だと判断した。そして、車から降りた少女が次に連れて行かれたのは、どこかの地下室だった。

もしかすれば、そこに行くまでに何かがあったのかもしれないが覚えていない。

ドアを開けると薄暗い部屋の中央で冷たくなった母親が眠っていた。表情はなく、色も少女が知っている肌色ではない。

だが、もう動かぬ母親を見ても少女が驚く様子を見せる事はなかった。

知っていた。何故かその死に顔を知っていた。

少女は、次に後ろに立っていた父を見た。

放心状態の父は、殺人の容疑だと言う警察に連行されて立ち去った。そこからの記憶もまた少女の中には存在していない。

覚えているのは自分が背伸びをしてドアを開け、ようやく家の玄関に入ったところからだ。

「いない……」

誰もいない家は静かになっていた。

視線を上げた少女は水槽を見た。

そこには熱帯魚がいた。

何も知らない小さな金魚たちは少女を見ていた。

丸い瞳で、じっと見つめている。彼女は水槽に入る管の先にあるプラグを何気なく抜いた。

何も変わらない様子を見た少女はそのまま部屋に入った。

一体何が起こったんだろう。

そう思っていた少女の意識は次第に睡魔に飲まれ遠ざかっていった。

とある朝、目が覚めた少女は誰もいない家の中を動き回っていた。
そして、不意に水槽を見た。

十数匹の熱帯魚が死んでぷっかりと浮かんでいる。

腐りかかった臭いに少女は顔を顰めた。

目玉が浮き、体には共食いの痕。

少女は網で金魚を掬って庭に出た。

足元の土を掘り返して金魚を埋める。

徐々に埋まっていく金魚を見て少女は溜め息をついた。

「さようなら……」

そう淡々と呟いた少女は最後の土をかけた。

父親は帰って来なかった。

母親の葬儀も終わった。

親類が同居を申し出たがそれを断った。

不思議な事だったのだろうが、彼女はそれを望んでいた。

耳鳴りが消え、周りの雑音も消えた。

少女の口元は微かに微笑んでいた。

そして、また呟いた。

「さようなら……お父さん、お母さん」

何かで聞いた話によると父親は、自殺したのだとか。

ただ、それを電話越しに聞かされても彼女は何も思わなかった。

黙り込んでいるのは、ショックを受けた事だろうと判断した大人達はそれ以上は何も言わなかった。

それから長い間、少女に言葉が投げられる事はなかった。

時折、様子を見に親類が家を訪ねる程度でその回数も少しずつ減っていった。

獣心7

獣がいたんだ。

私の前に

そこに

いた。

それをどうにかする術を知らず

私はただ無心に見据えていた。

突然の意識の覚醒に私は軽い眩暈を覚えた。
いつ寝たのか、全然覚えていない。

そして、何をしていたのかも覚えていない。

私はベッドから下りて窓を見た。

明け方の光がカーテンの隙間から入り込んできている。
だが、やはりその日差しを浴びる気にはなれなかった。
私にとって光は忌むべきものだから。

目覚まし時計を手にとって覗き込む。

まだ五時半。外は薄暗い。

行動するつもりもなかった私はそのままベッドに寝転がった。

そして、昨夜の出来事を思い出そうとする。だが、何かが引っ掛かって思い出せない。

私は記憶の詮索をやめてテレビをつけた。

画面がパツと光って、徐々にニュースの様子が映った。

こんな時間に行っているのはニュースぐらいだ。

暫く眺めていると速報が入った。

未明、女性が襲われ、現在意識不明。

「生きてたんだ……」

気がつけばそう呟いていた。

画面が変わり、速報のニュースを取り上げた。

早朝は情報の相互が速い、だから速報がすぐ取り上げられる。

それを何の気なしに眺めていた。

キャスターが落ち着き払った様子で淡々と文章を読み上げる。

チリチリと煩い画面に私は苛立ってきた。

足をガタガタと踏み鳴らす。

——「今回の事件は意識不明になるようなものだったのでしょうか」
キャスターが解説者に回す。

——「今回はそんなひどいものではなかったらしいです。単純に手で首を絞められただけですから」

——「どうして意識不明になったんでしょうね？」

——「原因は不明です。今回の事件には謎が多いんですよ」

——「と、言いますと？」

——「まず目撃者がいないこと、次に被害者の容態ですね」

——「捜査上では、犯人は男性像ですよ」

——「はい、しかし目撃者もいませんし被害者の状態が状態ですの
で何とも言えませんね」

——「そうですね、ありがとうございます！ 続きは朝のニュースで続報を待ってお送りします」

淡々とした会話が終わり司会者の言葉で番組は一旦、幕を閉じた。
こんな時間帯では視聴率は取れないからである。

私は目を細めてテレビを消した。

覚えてないのに、さっきの事件を知っていた。

「どうして……」

自然に私は呟いていた。

誰に言ったのかは自分でもわからない。

この家には、誰もいないのに。

そう言えばいつも私を起こしに来る猫はどこに行ったのだろう。

不思議に思ったのに、それが当然のような気がする。

混濁する記憶と感覚に痺れを感じた。

不意に床を見て目に入った黒ずんだシミに悪寒が走った。

わからない、知らない。

だが、それが何なのかはすぐにわかった。

「……血」

眩きつつ屈み込んでシミを撫でた。

そんな事では分らないが、どうしてだか血だと知っていた。

「……どうして、こんな……」

不安と焦りに押されて言葉が出てくる。

喘ぐように空気を求めて立ち上がった途端、呼吸が乱れた。

動揺している？ 何故？

記憶と感覚が食い違う。

私は妙な威圧感を感じて、ドアを開け放った。

そして、すぐ前に広がる玄関を見て嘔然とする。

誰かが立っていたのに、私がドアを開けると同時に掻き消えてしまった。

「誰……誰なのッ！」

玄関に立っても誰もいなかった。素足で立つと足がひんやりと冷たい。

暫くの静寂のあと、リビングから音が聞こえた。

私は胸を支配する感情を抑えてリビングに向かった。

そっとドアを開ける。一瞬、体が強張った。

また人影が見えて掻き消えた。今度は二つの人影だ。

見た事のある光景。昔、見たことがある？

その時、私はどうしたのだろう。それを見ていたのか。

いや、それとも逃げたのか。

ドアを少しずつ開いていく。リビングには、なんの変化もない。

「どういう、こと……」

呟いた私の声は開けたドアの軋みに消された。

そして、私はその感覚に気付いた。

意識の中で、記憶を支配する何かの存在を……――――。

獣は

言葉を欲さない

死は

生を欲さない

生は

死を欲する

獣心 8

『やれやれ……手間の掛かる奴だぜ……』

俺は溜め息をついた。

そして、ゆっくりと腰を下ろした。足元はひんやりと冷たい。

俺には、それがひどく心地よく感じられた。

周りに散らばる肉片を適当に掴みあげて潰す。

肉が裂けて徐々に傷口が広がっていく様子は快楽そのもの。

ただ、俺がいるこの場だけは干渉できる範囲が狭くなっている。

なぜなら、此処は奴の記憶体だから。

俺の事を知られすぎても困りもんなんだ。

ならば、奴が知る俺のことを消すだけ。

俺は潰れた肉片を放り投げた。

そんなものが何故、ここにあるのか。

記憶体とは、心。つまり、感情さえも支配していてその象徴的なものを具現化する。

その結果がこれだ。

潰れた肉片の感覚に手を動かした。何ともいえない感情が伝わってくる。

あの感覚も奴の記憶なのだから、妙な気がしても仕方がない。

俺は、立ち上がって手を水平に合わせた。

指の隙間から溢れる空気を収縮して吐き出す。

それの中に身を投じて外に出て、見てみれば奴はリビングで啞然と
していた。

まるで狐に騙されたような顔してやがる。

いや、あながち外れではないだろう。

記憶を改竄したのだ。それ相応の作用があっても不思議はない。

恐らく記憶を弄った事で過去の出来事が視聴覚を通して伝わっている
のだろう。

俺は奴に背を向けて闇に溶け消えた。

狂ってしまえ、そして血を求めて死を欲せ

蛍が飛んでいた

漆黒の闇に一点の光を灯して

その光は決して強くも大きくもない

ただ、そこにあるだけ

これが私の記憶

これが私の最後の記憶

光と闇は表裏一体

片方がなければ成立しない

それは、すべての存在に当たる

ただ、『闇』と『光』という存在を除いて

時足れば死にゆき魂を求めるだけに出来た闇

その闇を抑えるために出来た光という存在

互いを抑え付け合う存在でありながらね

常に背中合わせにある

それは、人間の感情とて同じだ

それが俺の考え

そして、俺が闇そのもの

それが俺の真実

もし、人を信じることでできていたのならば

もし、誰かが彼女と共にいたのならば

もしかすれば、彼女は……。

獣心9

覚えていますか？

あの獣のことを

忘れていませんか？

あの犠牲者を

私はリビングで立ち尽くしたままだった。

我に返ってふと思う。

此処で、何を見たのか。

「……そう、だ」

かつて、この場所で両親が言い争っていて、私はそれを見ていた。父が怒鳴れば、母が叫ぶように声を上げる。

二人の声が一つに混ざり合って、誰の声かもわからなくなる。それが耳鳴りみたいに煩くて。耳障りで、邪魔で。

思わず、部屋から出た私は真っ直ぐにここへ来て――。

「ここに、来て……あれ？」

思い出せない。どうしてだか、その先は霧がかかったようになって鮮明ではない。

私は天井を見上げた。

暗いシミのある天井がどこか懐かしい。

一歩だけ前に出ると床が小さく軋んだ。

空気が淀んでいて暗い。

何気なく視線を床に向けると、そこには何でもない床のへこみ。

私はそれを見つめて止まった。

ここに、父がいて母がいて私がそこに入って。

そして、私が手を上げて、それで――――。

そこまで考える事が出来たのに、意識が突然、混濁した。

激しい眩暈に襲われてバランスを崩して。

だけど、私の体は床に倒れず誰かに支えられた。

――――……誰？

確認するよりも早く、私は意識を手放してしまった。

勝手なことしやがって……。

俺は低く舌打ちして奴の体を床に置いた。

ガックリと項垂れた奴は起きる様子もなくただ混沌へ意識を閉ざし

ていた。

立ち上がって手を眺めた。

俺に本当の肉体があれば……——とあって、それがひどく馬鹿馬鹿しい話だと気づく。

あったとしてなんだ？ 何がどうするって？

今の俺には、意識を喪失した生身の肉体を空間として掴むか

相手の意識を取り込み自我を支配下に置くしか、人間の体に関与することは出来ない。

だが、肉体を求めるほど何かをしたいワケでは、ない。

『仕方ねえ……』

俺はまた、奴の記憶体に入り込んだ。

まるで記憶のコードを繋ぐようにして、操作する。

奴の感情が俺に直接、伝わってきた。

『相変わらず気持ち悪いなあ、ええ？』

記憶の底に落ちたまま、こびりつくように残ったどろどろとした感情。

殺しても殺してまだ物足りないというのに記憶を喪失してしまつて、残った感情。

吐き気を催した俺は慌てて顔を背けた。

人間以上に墮落した汚れた感情。そこが気に入ったのだが、少し異質すぎて俺に合わない。

このままでは、俺が飲み込まれて消えてしまう。まあ、そんな事は赦さないが。

喉の奥をつく熱に立ち上がった俺は広がる血の海を見渡した。

血の中に埋まるのは、消えた記憶たち。

記憶たちの中に、具現化された物体が転がっている。

奴が殺めた人間の血肉か、それとも奴が殺したい奴らなのか。

何にしろ、俺には関係ない。ただ俺は自由に使える人形が欲しい。ただそれだけなのだから。

『最悪だぜ……ここはよ』

吐き捨てて目を閉じた。意識の中に混濁したままだった奴の感情が乱れる。

胸に渦巻く感情を押し殺しながら外に出た。

見遣れば奴は落ち着いたように、ただ寝息を立てていた。

その喉を切り裂いて、白い肌に赤い血を垂らす。

浮かんでは消えるそんな光景に、どれほど焦がれたことか。

いつか全ての人間をこの手で血に染め上げるまで。

俺は利用させてもらう。

”お前”という悪魔に魅入られた人間紛いの女を。

酔い痴れてやろうじゃないか。

お前という贄を餌として

その血を酒代わりに盃に満たして

水さながらの心を

自身の手で赤く染め止めて

そうすれば、

恍惚の人形となろう

闇に溶ければ、すべて同じ……

獣心10

「……あっ」

目を開けて意識の完全覚醒を待つ。

ぼやけていた視界が次第に鮮明さを取り戻していく。

「……あれ……？」

起き上がって周りを見回すと、頭の奥がずきずきと痛んだ。

重い何かで叩かれているような気分で、体の芯がずっしりと重い。

だが、気絶する前の吐き気はもうなかった。

見上げた時計は、あまり進んでいない。何も変わりはない。

消え入りそうな声を上げて床を撫でた。

冷たくて心地よい。

「……眠たい」

さっきまで、存分に眠ったのに。

それでも、睡魔が容赦なく瞼を落とした。

目を閉じれば、頭痛が少しだけ引っ込んでくれる。

痛みも何もなく、このままずっと眠っていたい気持ちになる。

「……っ」

遠くから耳を刺激するインターホンの音。

容赦なく意識に入りこむその音で覚醒した。

「誰……」

ずきずきと痛むこめかみを押さえながら渋々起き上がって玄関に向かう。

そつとドアを開けると夕日の眩しい光が目に入ってきた。

目を細めたまま視線を前に向ける。

そこに立っていたのは私が”よく知る”人物だった。

「こんにちは」

柔らかに笑う女。

彼女は、私の数少ない友人。いや、ひょっとしたら唯一の友。

だけど、どうにも不自然。

「何の用……?」

いつの間にか頭痛が治まり、心なしか明るい自分の声。

彼女が少し困ったように笑った。

「突然でごめんね……来ちゃった」

答えになっていない事はあえて指摘しない。

そこまで入り込もうとは思わない。動こうとしない彼女を部屋に通した。

何故か。理由は分からない。通さなければ、と思った。

「ごめんね。予定とかあった?」

「別にないかな……」

高くもなく低くもない。これといった特徴のない声が私以外の存在として部屋を満たす。

私以外の存在は、あの猫以来。あの猫、何処に行ったのかな。あとで探しておかなきゃ。

あとで。あとで。あとで?

「猫は?」

彼女の質問に私はハッとして振り返った。
猫。

それは私が訊きたい。何処に行ったんだろう。

「ほら、昔いたでしょ？」

純粹そうな顔で首を傾げる彼女。

そんな彼女を見つつ、そんな昔から知り合いだったのだろうかと思に思う。

私が覚えていないだけかもしれない。

「いなくなったの。あとで探そうかなって」

「そうなの」

彼女も別に追及しない。関心がないのだろう。

その視線は次は別のものを探していた。

「この部屋は、全然変わらないね」

その言葉にまたも違和感を覚えた。

彼女のような女性がこんな部屋にいる事自体が違和感なのに。

そんなに頻繁に入れたことがあるのだろうか。

覚えていない。

「だろうね……」

適当に相槌を打って彼女を横目で観察する。

彼女は、相変わらず不思議そうに部屋を眺めている。

窓際のベッド。

テレビ。

丸い机に一つの椅子。

小さな台に乗った古いラジオ。

たったこれだけの部屋で何を探しているのか。

別に興味はないし、知ったことでもない。

私は軋むベッドに座り込んだ。

「何の用……？」

先刻と同じ台詞を言う。

彼女が肩越しに振り返って、またあの苦笑を浮かべる。

「別に用って事はないの。ただ……」

曖昧な笑みがふと曇る。

その変化が、怖かった。どうしてなのかは分からない。ただ、怖かった。そして、見るのが嫌になった。

「あっそ……」

鬱陶しくなって顔を逸らす。

すると、彼女は申し訳なさそうにしながらも隣に腰掛けてきた。

「何年も連絡入れなくてごめんね」

「別に……」

「突然、来ちゃったし……迷惑だったでしょ？」

「迷惑なら入れてないよ……」

そんな無意味な会話が数分続いて、ふと気付けば外が少しずつ暗くなってきた。

真っ赤な太陽がそろそろ消えて、漆黒の闇が落ちて来る。

心地良い時間は今からだ。

「帰らないの……？」

「帰れないの」

繰り返すようにして返された言葉に、流石の私も怪訝な顔をする。突然訪れて。用事も告げず。帰ることすら出来ない。

「……ふーん」

「聞かないの？」

「聞いて欲しいの……？」

私の言葉に彼女はまた困ったような顔で黙り込んだ。

私とは違う彼女。伏し目がちにしているも綺麗な顔。

儚さと憂いを帯びた双眸。

ああ、どうしよう。

どうしたらいいんだろう。どうしたら。どうしたら。

一体どうしたら、壊せるのだろう。

「迷惑？」

「別に……」

「本当？」

「……うん」

「いてもいい？」

別に私がどうのという事ではない。

いちいち確認する彼女に少し苛々する。

ただそれは口に出す程のものではなくて。

だから、私はまた静かに立ち上がって台所に向かった。

何か食べないと死にそうだと訴える腹のために食べ物を探す。

思った通り、何もない。あれ、前にも確認したっけ。

私が部屋に戻ると彼女が顔を上げた。

「食べる物がないんだけど……」

「じゃ、買い物に行く？」

「買い物……？」

「何もないなら行かなくちゃ、私がお金出すから」

彼女は言うなり私の手を引いた。

何が嬉しいのか。

彼女にせかされて久々に外の空気を味わう。

久々？ もうわからない。

コンビニに到着すると彼女はささっと買い物を済ませた。

「どうしたの？」

「外出は久々だなんて……」

「たまには散歩もしないとダメだよ？」

眩しいコンビニの光に背を向けて私達は歩き出した。

沈黙の中に二人分の足音だけが響く。

前にもこんなことがあったかな。

二人分の足音。

確か、確かあの時は前から人が来たんだっけ。

「ねえ」

彼女の声が私の思考を遮った。

別に問題ではなかったけれど、何かが引っ掛かった。

「何……?」

「貴女は闇の存在を信じる?」

まるで天女のような笑みを浮かべて私に問い掛けて来た。
信じる?

何を言っているのか分からない。私は闇しか知らない。

光の中にも影として闇が出来るが、闇の中には光は出来ない。
闇は遥かに強いんだから。

「当然……」

「じゃ、光は?」

「……それは、信じてない、かな……」

信じないだけなのか、それとも信じられないのか。
もしくは、ただ信じたくないのか。

私には判らないけど。

「そう」

彼女がふと前を見る。

意味がわからない質問だ。どうしようもなく意味のない質問だ。
この女は何が言いたいのだろう。

「それが……?」

「え? うーん、なんとなく……かな?」

「ふーん……」

「ただね、人間の存在って光なのか闇なのかなって」
光か闇か?

また意味が分からなかった。

どうして、一緒にするの?

人間は闇のように精巧でも高貴でもない。
人間は光のように輝いている訳でもない。

「どっちでもない……」

「そう思うの?」

軽く頷くと彼女はどう思ったのか考え込んでしまった。
街灯がチカチカと周りの木々を照らす。

この道を車が通ることは滅多にない。
……？

彼女は どうしてここがわかった？
どうして知っているの？

……。

教えた覚えはない。

いいや、彼女と付き合った記憶すら曖昧だ。

「ねえ……」

「なに？」

あんたは、何者？

血に飢えた獣よ

道に転がる死に切れない人間を

哀れにも生きることが出来ない人間を

喰い尽くせ

獣心 11

獣に規則はない

あるのは本能という名の残酷性

誰がそれを罪と言えますか？

学校という空間のクラスという名に縛られた無意味な集団。
何もかもが嘘くさくて。

そして、何もかもが煩わしい。

ざわざわと煩いそこを抜けて屋上に出る。

それは、いつもいつも、私がしていた行動。

話している間も弱点の見つけ合い。

じやれる振りをした仲良し演技。

無意味な言葉を信頼と勘違いする馬鹿な奴ら。

見ていて苛々する。

邪魔でしかない。

いや、苛々するという感情さえ知らなかった。

誰だってそうだろう。

誰かが憎い。

誰かがウザい。

誰かが邪魔。

誰かが鬱陶しい。

それなのに仲間を求める。

それなのに信頼を求める。

それなのに……――。

あまりに滑稽。

無様すぎる。

殺意、敵意、悪意。そんな化け物を心の中に棲ませておいて凶々しく生きてる。

それが私たち、人間。

その中で。まるでなんの穢れも知らないかのような彼女。

彼女の死への恐怖。

彼女の命への執念。

それが見たい。

いつからかそう思った。

いつからか。いつからか……。

「ねえ……？」

突然、立ち止まった私を不審に思ったのか。

彼女は軽く屈んで私を覗き込んでいた。

その目だ。

まるで理解しているような。

まるで見通しているかのような。

まるで助けを差し伸べるような。

そんな、目。

馬鹿げてる。馬鹿げてる。

あんたの目は、完全に上から見下ろす者の目。

「どうかした？」

「なんでもない……」

「それなら、いいんだけど……」

彼女はそう言って微笑った。

あんたは。

死ぬ時なんて言うんだろうね。

獣の咆哮、それは悲鳴。

「本当に平気？」

心配でもするかのように彼女は再度振り返った。
苛々するんだ。

あんたは何様だよ。

それで慈悲のつもり？

優しくしているつもり？

私より上に立ったつもり？

馬鹿げてる。馬鹿げてる。

「何でもない……」

「そうならいいんだけど……」

聞いたような台詞を言って彼女は歩き出す。

いつも、いつも私の前を歩く彼女。

ああ、なんて鬱陶しい存在なんだろう。

私は軽く唇を噛んだ。

苛立ちは、まだ消えない。

「ねえ……あんたは知ってる？」

独り言だった。

それはなんの意味もない、ただの独り言。
誰に語りかけた言葉でもない。

返事が返ってくる筈なんてないのに。

それは、確かに私の耳に届いた。

「え？」

一瞬、こめかみがズキッと痛んだ。

掠れた声だったけど、聞こえた。

空耳？

「どうしたの？ 何か聞こえた？」

そこに彼女の声が割り込んだ。

私は静かに顔を上げた。

彼女は、私の家の前で止まっていた。

「ねえ、何か聞こえた？」

何故、そんな事を聞くのだろう。

不思議に思った。

思っただと思う。

たぶん。

曖昧。

彼女が笑った。

無邪気に邪気を帯びて。

無意味に意味深に。

ただ、笑ってた。

そこで私の記憶は途切れた。

唐突な闇に私は……。――――。

吼えろ

獣よ、今から喰い散らせ

吼えて

獲物を捕らえろ

獣心12

死にたい、なんて言うなよ。

……？

生きてもないくせに。

………。

「アンター——随分と、面白い事を言うじゃないか」

私の口が勝手に言葉を紡いだ。

誰？誰？誰、あんた。

誰なの。何なの。やめて。やめてよ。

「気付かなくてもいい事だってあるんだ」

”それ”は私を真似て喋っていた。

私の手が風を切った。違うのに。

こんなの私じゃないのに。”それ”は私の振りをして笑った。
口元で。にんまりと。裂けたように笑う。

「ゲームオーバーだ」

「……——ッ！」

彼女の声は言葉にならなかった。

「あ、…あれ？」

その時間は既に翌朝である、
というのだと思う。

私はベッドで寝ていた。

何があったのか、なんて判らない。

確か……確か……。記憶を探ってみるけど、思い出せない。ゆっくりと起き上がって何気なく窓を開けた。

「あ……」

彼女は庭にいた。

でも、眠っている訳ではなくて。起きているわけではなくて。座っているわけではなくて。立っているわけではなくて。

胸が深く抉り取られ、解放された臓器が無遠慮にはみ出していた。木に凭れ掛かるようにしている体は既にぐったりとしていて。

その双眸に光はなく、瞳孔は開き切っているみたいだった。

血が白い壁をどす黒く染め上げていた。

肉片が無遠慮に撒き散らされていて、通常なら直視できない光景なのかもしれない。

彼女の白い手が血の中で土を握り締めて、何を訴えている。だけど、それが何なのか。

私には全くわからない。

わかったところで、きつと理解できない。

「……………」

私は、もう一度彼女を見た。

空気に晒されて変色した血。

彼女の身体に穿たれた穴は、もう開いたなんてものじゃない。

向こう側まで完全に貫通していて骨らしいもの覗いている。

寧ろ手を突っ込んで肉ごと引き千切った感じだ。揺れているのは何だろう。

解放されたかのようなその顔は恐怖でもない。

瞳は、なんの感情も宿らせる事なく薄っすらと開いているだけ。

彼女の長い足は上品にも斜めに座り込む形で固まっていた。

「……………」

私は、わからなかった。

それがどうして其処に存在するのか。

何故、此処にコレがあるのか。

「……………あーあ」

だが、この殺戮を、肉体の破壊を、彼女の死を、喜ぶ自分がどこかに居た。

「あんたさあ……………」

私は笑っていた。

さつきからずっと。顔が戻らない。ずっと笑っている。

私が笑っている。おかしな事に。

「死ぬ時、そんな顔するんだ……………」

助けを求めるでもなく、現実を見るでもなく

諦めるでもなく、希望を持つでもなく

それはそこに存在していた事だけを知らしめていた。

私は窓枠に足をかけて地におりた。

足元で血が音を立てる。いや、血じゃない。血で固まった土だ。

「でも……………」

私は笑いを止めた。

その手で彼女の手を取る。勿論、冷たすぎて何も伝わってこない。

爪の整った綺麗な手。細くて長くて綺麗な指。

「死ぬ事は怖くなかったよね……………」

苦しんで死んだ。安らかに死んだ。

どっちでもいい。何にしろ死は終わりだ。

終わりが始まる事はない。死は終わりであり、始まりの終焉だ。

死んだ後に何かを言うのは残った者の勝手な妄想だ。そんなの押し

付けでしかない。

「……………あ、はっ」

笑みが漏れた。彼女の手を落とす。

そして、血で汚れた手を見つめた。

何かを思っただけ、わからなくなった。

血を、それも他人の血を見て何かを思った。

なんだったかな。

「あは……は、ははッ！」

爽快、爽快。今日もいい目覚めだ。

この場所には誰もいない。

誰もいなかった。誰も来なかった。

だって、私は彼女を知らないんだもの。

あるのは肉の塊だ。私はずっと一人だ。

ずっと、ずっと。今までも、これからも。

どう足掻いても独りだ。歩き出しかけて私は止まった。

忘れていた。「……ごめんね」

さようなら。おやすみ。ご苦労様。

そして、おめでとう。君はこれで生きる苦痛を味あわずに済む。

よかったね。羨ましい限りだよ。

全く、なんて幸せ者なんだろう。死に逃れる事が出来たんだよ。

祝杯を血で、晚餐を己が肉で。遺書を血文字で達筆に描いて。

最高の最期じゃないか。綺麗でおぞましい。

永久に続く最高の結末。

私は笑いながら玄関へと戻った。

そこには、また知らない奴がいた。

獣が食い散らした。

血を

肉を

骨を

私は知らない

私は獣ではない

私は獣ではない

私は獣ではない

……獣ではない？

ホントに？

獣心13

神がいたとしよう

それが人間を創造したとしよう

それが世界を成立させたとしよう

なら、この不平等も神が創った事だろう

神がいたところで

所詮は何も変わらない

「誰？」

そんな事は気にしていない。

ただ単純にそいつを見て思ったから口を開いただけ。

そいつは長い切れ目で私を見た。

髪は異常に長く、それでもサラサラと綺麗な黒。

その双眸はさつき見た血のように深紅。

まるで人形のように整いすぎた顔立ちがこいつの異常さを引き立てていた。

私にとって異常なんて意味がないけど。

異常は周りの人間が自身と比べて思う事だから。

私が普通じゃないんだから、案外こいつは普通なのかもしれない。

「……あんたが殺したんだ？」

そいつは答えない。

今にも消えそうな存在の薄い雰囲気だけを漂わせて。

ただ、笑った。

『見えるのか……』

声がどこからともなく響いた。

目の前のこいつからじゃない。

直接、頭に響いてきた。

「誰？」

もう一度、問い掛ける。

「誰？」

あんたは何者だ。

「誰？」

存在の知らない物体は人型をしているだけで脅威。
私にとって不快。

それでも、こいつは笑ったまま。

『誰でもない。俺はお前だ』

その声が静かに言い放つ。

意味がわからない。

いや、わかる。

こいつは人間じゃないんだから。

いや、私が人間じゃない？

この際どっちでもいいんだけど。

「私、ねえ」

そいつはただ笑っていた。

慇懃っぽい笑みを口元に浮かべていた。

ニヒルといえそう。

シニカルと言ってしまったえそう。

何にしる冷淡な笑み。

この私が最も親しみを覚える笑み。

『どけよ、時間がない』

言いながらそいつは私の隣を抜けて庭へ出た。

その背中を肩越しに見ながらつぶやく。

「あの子を逝かせたのはあんた？」

そいつが振り返った。

その顔が一瞬だけ僅かに意外そうだとも言いたそうに顔を崩した。
だけど、それも一秒も間を開ける事なくその顔に笑みが戻る。

『そうだ』

「ありがと」

そこでまたそいつは顔を顰めた。

今度は嫌悪するように。

私は自分が口元で笑っているのに気付いた。

「綺麗だったよ、いいもの見た」

何を言ってるんだろう。

『……そうか』

適当な返答してそいつは庭へ行く。

それが角を曲がって消える。

あの子が寝ている場所もここからは死角。

関係ない。

私は玄関を開けて中に入った。

相変わらず冷たい空気。廊下を歩いて台所へ。

そこで私は深呼吸をした。生きた人間の匂いがしない。

ああ、それは私が生きていないという事。

私は死んでいないだけで生きているとは言えないのだ。

自然、笑みがもれた。いやいや、不謹慎。

庭で人が、少なくとも私よりは遥かに生を謳歌していた人間が死んでいるのに笑ってばかりはダメだ。

生者への死者への冒瀆。これこそが私の生きる振りをする利点ではあるが、ここでは少し控えないと。

話した仲だ、他人だけでも。この事は誰も知らない。この近くに人間など住んでいない。

私も含めて皆世界から離脱した者なのだから。

警察など呼ばないし、呼べない。世界を離脱したのは自発的ではな

い連中もいるから。

右隣は人食い願望者だし。向かいは小動物殺傷人だし。

左隣は偏食殺人趣味だし。斜向かいは自虐症候群だし。

私も含めて。この世から逃れた奴や、自分から逃げたやつばかり。

此処で、誰が、何時、どう死のうと殺されようと、世の中には繋がらない。

全く別世界の事件なんだし。

私はテーブルに手について溜め息と共にまた笑った。

死ねばいい

獣など

生きることなく果て

人間ごとき食い殺し

すべてを破壊して死ねばいい

獣心14

言葉を作った者は残酷だ

言葉さえなければ傷付く事も

又、傷つける事もなかった

言葉は嘘と偽りだ

言葉を紡ぐのに真実はいらない

仕事を終えた後、ずっと屋根の上にいた。
俺みたいなのが屋根で一晩過ごすなんて不自然すぎるが、別に悪くない。

夜が明けて窓を開ける音がして奴が出てきた。
俺はそれを目を閉じながら感覚で見る。

暫くすると奴が笑いながらこっちに近付いて来た。
風が俺を通り過ぎる。

奴は少し目を細めて俺を見た。

「誰？」

別段当然の会話のように。

その台詞をいうのが義務かのように奴は言った。
そこで俺は奴に俺が見えている事に気付く。

奴は静かに言った。

「……あんたが殺したんだ？」

ぞくりとするような生気ない双眸で俺を見る。

異質なだけでは留まらず

異様なだけでは収まらず

異形なだけでは物足りず

『見えるのか……』

逆に問うと、奴は一瞬顔を怪訝そうに歪めた。

俺の声は空気を伝わらない。

空気を共鳴させない声は音ではない。

俺は直接奴の脳に話し掛けている。

「誰？」

奴はただ聞く。

「誰？」

意味なく聞く。

「誰？」

価値のない問いを続ける。

俺は当然の答えを用意している。

それが真実であり俺の存在が嘘である限りはこの答えが当てはまる。

『誰でもない。俺はお前だ』

奴は黙ったままだった。

そして、暫くしてゆっくりと口を開いた。

そんな動作さえ鬱陶しそうに。

気だるそうに。

「私、ねえ」

聞きながら俺は歩き出す。

まだやる事がある。

俺のためだ。

誰のためでもない。

まして、お前のためでもないのだ邪魔してもらうのは迷惑だ。

『どけよ、時間がない』

俺は言葉を吐いて奴の隣を過ぎようとした。

そこで奴が視線を向けたのがわかる。

「あの子を逝かせたのはあんた？」

その言葉に俺が振り返る。

奴が生死に癒着があるとは思わなかった。

俺はまた当然の言葉を言う。

『そうだ』

「ありがと」

奴が笑った。

綺麗な笑みで。

俺は背中がゾクゾクするのを強く感じた。

人間の中でも腐った奴。

腐っていながら汚れない。

汚れないのに汚らしい。

なんて女だろうか、こいつは。

「綺麗だったよ、いいもの見た」

俺は言葉の意味を解さない。返事をするだけだ。

『……そうか』

俺はただ歩く。

そして、葵といった人間を見下ろした。

肉塊だ。これはもう人形以下だ。

使い物にならない。全くとんだ邪魔が入った。

俺の仕事だ。奴は俺の獲物であり、俺の器。

それを勝手に清められては困る。

浄化など出来ないんだ、闇は。

ただ消えるしかない。俺はその手で死体に火を放った。

臭いはなく人間に火は見えない。

草木は火とは全く関係なくただそこにある。

この火は命を燃やせない。

不意に足元を見れば裸足の足跡があった。

奴に決まっている。その足跡は血だまりになんの躊躇なく侵入し死者の領域を侵していた。

俺は屈み込んでその血を手にとった。

綺麗、か。俺は血を綺麗などとは思わない。

血は体内で命を司る間のみ美しい。死した者から出た血など汚らしいだけだ。

汚らしいだけ。ああ、全く人間は。俺は血を火で焼いて手を見つめた。

燃えない。生きた者を燃やせない火に燃えないというのは生きていくということだろうか。

だが、俺は風を留まらせる事も光をさえぎり影を作ること叶わない。
死んでいるだとか、生きているだとか、もはや関係のない存在なのだ。
女の死体が完全に消える。
白い灰が舞い上がり、風になびいて散る。
俺はただそれを眺めていた。

獣が

獣が

ただ食い散らすのみ

重心15

かごめ、かごめ……

……籠の中のトリは

いついつ出やる……

……夜明けの晩に

鶴と亀がすべった……

……後ろの正面だあれ？

ねえ、私の後ろにいるの……だれ？

ナイフが乾いた音を立てて床に落ちた。

そして、少し遅れてぽたぽたと血が流れ落ちる。

誰の血なのか、どうかさえわからない。

私は、ただいつの間にか手に持っていたナイフを投げ捨てただけ。

右腕が痺れ、じりじりとした痛みが肩まで広がってくる。

ベッドに寝転がったまま、私はゆっくりと視線を窓に向けてみた。

「……………」

『あいつ』が何をしているのかは知らない。

それに、知ろうとも思わない。

窓から見えるのはただの景色。

普段と何も変化がない、いつもの様子が無駄にあるだけ。

「ねえ…………」

窓に声をかけてみた。

意味があるのかどうかなんて、無関係。

自分の行動に一切意味をつけるなんて、それこそ無意味。

「…………あんたは何なの」

なんて問いかけ。

何、だってさ。

そんなの、自分の事もわからない奴が問うもんじゃない。

自分の事がわからないのに、他の事をわかってとするだなんて。

「…………まあ、いいけど」

そんな馬鹿馬鹿しいにも、程がある。

窓の外への興味を失い、ふと見遣れば血は私のものだった。

あのナイフは私のもので、ナイフで切ったのは私の腕で、あの血は

私の血。

気付かなかったなんて、なんだか笑えてくる。

血の色は、皆赤いのに、どうして皆違うんだろう。

仲良く出来ない。一緒である事でしか、仲間として見れない。

敵を作らなければ、その仲間さえも成立しない。

馬鹿馬鹿しい生き物の、人間。

そんな人間の中で、どうしても違いがあるのか。

いっそ、皆が同じであれば全てが上手くいくのではないかと思う。

思うだけで、別にだからどうしたという訳じゃない。

だから平和になれだとか、そんな事は望んでいない。神様じゃ、あ

るまいし。

選択するという事、それは何かを捨てるという事。

何かを選ぶという事は、何かを捨てる事。愛するという事は、何かを失うという事。

互いに束縛して、自由を失うか。自由という名のもとに、無意味な時間を過ごすか。

くだらない。くだらなさすぎて、もう何も言えない。

血が落ちる。血がぼたぼたと落ちていく。

真っ赤な血。

それが滴り落ちて、音を立てる事で私という存在を認識できる。生きているの？ 死んでいるの？

そんなの、私にはわからない。

意味のない文字の羅列が続く分厚い本。

ただ流れるだけな流行の音楽。

虚ろな現実と、明確な幻想ならばどちらを選べば幸せか。

いっその事、死んだらいいのか。

どうせなら限界まで生きればいいのか。

友達を作ればいいのか。友達なんか捨てればいいのか。

何かを壊せばいいのか。何かを作ればいいのか。

イラナイと言われた人間はどうしろと？

世の中は全て理不尽と不条理だ。

頑張った者が馬鹿にみる。光を浴びるのは不正なもの。

獣のようにただ食い散らして生きるのもいいのかもしれない。

聖人のように自分にとって無意味な意味ある人生を送るのもいいかもしれない。

貪り続けるのも、求め続けるのも、もう飽きた。

終わりがあるとするのならば、始まりはなんだろう？

死んだら終わりか。生まれたら始まりか。

死んだら、ただの物体になるのかな。

ただの肉塊で、ただの物で……。

違う。誰かが死んだら、誰かがそれを知ってる。知ってる限り、それはただの物体にはならない。

ならないだけで。それは――。

思考が交じり合って気持ち悪い。自分が何を考えているのかが、よくわからない。

私は、再び目を閉じた。このまま思考を続けるのは、腕が重い。本当に重いのは気持ちかもしれないけれど。

ゆったりと目を閉じれば心地よい静寂が私を包んでくれた。

静寂は、味方だ。寂しさも何もかも閉じ込めて。

何もかもを奪い取って。全てを忘れさせてくれる。

睡魔が迎えにやって来た。

そう思う頃には、私の意識はもうなかった。

ただ、落ちる。ただ、眠る。

眠りに、落ちていく。

……籠の中のトリは
私は……

いついつ出やる……
もう出られない

……夜明けの晩に
……光がなくて、何も見えない

鶴と亀がすべった……
……冷たい音が響く

……後ろの正面、だあれ……？
私を操ってるのは、誰……？

重心16

求めていたモノを壊されるか

持っているモノを捨ててしまうか

大切にしているモノを奪われるか

さあ、選べ

風の音。

木々を揺らしたり、窓を叩いたり、渦を巻いたりする音。

水の音。

流れたり、落ちたり、振ってきたりする音。

火の音。

弾けたり、舞い上がったりする音。

葉の音。

擦り合ったり、踏まれたりする音。

耳障りだなんて思ったことはない。

人間の声なんかより落ち着くから。

こんな私を人はおかしいと言う。

変だというし、イカレテルとも言う。

精神病院を勧められた事はないけど、遠まわしに言われた事はある。

腐った人間の声なんか聞くより、断然イイに決まってる。

音楽。

あれだけは好きになれない。

人が造ったモノが美しいだなんて思わない。

高い声も低い声も、人間の声だというだけ。

どんなに素晴らしい歌詞だったとしても、所詮は綺麗ごと。

愛してるだとか、好きだっただとか、お願いだから愛してだとか

いつかまた会えるよねだとか、あの頃に戻りたいだとか

これからずっと一緒だよだとか、みんな仲間だとか

支えていてあげるだとか、もう、何言ってるんだか。

時間に支配されて毎日を進めるだけの人間。

生きることは死に近づくということ。

死に近づくということは生きた時間が長いということ。

病死も事故死も、そこで終わり。

殺されたとしても、自分で死んだのだとしても、死は死。

死Ⅱ終わり。

ただそれだけのことなのに、嘆き悲しみ続けるだなんておかしい。

所詮は他人。

自分じゃない誰かのことなんか、ホントはどうだっていいんじゃないの？

神様ってのがいるんなら、今すぐ教えてよ。

どうして人間なんか創ったの？

イトコロなんか全くないのにさ。

歴史上のお偉いさんだってイイコトなんかない。

天才だなんて呼ばれるのは死んでからのオハナシ。

イキテイル中で満足して死んだニンゲンなんかイナイんでしょ。

いるんなら教えてよ。

不満なく死んだやつがいるのか。

思い残すこともなく、ただ死んだやつがいるのか。

あんたは死ぬその瞬間まで自分に一切の文句なく生きてこれたのかって訊いてやる。

誰に殺されても、誰の為に死んでも

何のために殺されても、絶対に誰も怨まないで何も憎まないで死んでいけるのかって。

そんな人間がいるんだとしたら、大声で罵ってやる。

お前なんか生きてなかったんだってさ。

お願いだから

そろそろ終わらせてくれませんか

もう厭きました

もうこれで十分です

もう終わりにしましょう

獣心17

人は、誰もが何かを背負って生き続けている

背負い続けるものは

それぞれなのだろうが

それは、ひどく重いものなのだろう

重すぎて

時には投げ出したくなるくらいに苦しくて

だから、負けた人間は

生きることが苦痛となるのだろうか

心というものを一つの籠の中に閉じ込めてしまえば、どうなるのだろうか。

ぼんやりとそんな事を考えつつ、私は静かに立ち上がった。
もし、他人には見えない存在が私にだけ見えるのだとしたら、彼は

そういう存在なのかもしれない。

だけど、私以外に見えない存在なんてものは誰にも認められていないのと同じこと。

つまりは、誰にも認めてもらえない存在なんて、いてもいなくても同じだということ。

お互いに認識し合うことで、相手にとって自分という、自分にとって相手という存在が成立する。

少なくとも、私はそう考えている。

つまり、一方的な認識では互いの存在を成立させたことにはならない。

そして、この場合。

私にしか見えないものだと仮定した場合、彼は存在していないということになる。

彼は自分で、私と同一の存在だと言っていたのだからそれは正しいのだろう。

「……………」

その考えは、正しいのだと思う。

だけど、同時にそれはなんだかひどく哀しい事のように思えた。

「……ねえ」

話しかけたところで、何も返って来ない。

そんなことはわかつている。

わかっているけれど、やめられない。

それは傷を舐めているだけの話かもしれない。

ただ、迷惑なだけかもしれない。

縫っているだけなのかもしれない。

だけど、それでも……………。

俺の存在を考えている奴のことなんか、俺は考えちゃいない。

持ち主が考えるのは、その人形をどうやって動かせるかくらいなんだから。

孤独だったからだとか、寂しいからだとか、そんな理由で馴れ合うつもりはない。

傷の舐め合い。

まさしくその通りだ。

傷は自分でどうにかすればいい。

同じ傷を持った相手を探して、なんとかして治し合おうとして舐めあう。

そんなことに意味はない。

ただ煩わしいだけなのだから、無意味だ。

『……………』

俺は奴に何も答えない。

答える必要なんかないのだから。

俺の存在。

そんなものは、考える必要がない。

誰が作り出したものであれ、誰かに依存するだけの存在であれ、俺は俺でしかない。

無駄なことを考えるより、俺の人形の最後の仕上げといくとしよう。そろそろ余興には飽きてきた。

苦痛のままに生き続けるか

苦痛を捨てて死に逃げるか

二つに一つ

選択肢はただ二つ

獣心18

心に棲み続ける獣がいたとして

獣に心を喰われてしまったとして

その人は、人間なのか

それとも、獣になるのか

「一人遊びが好きな子は想像力が豊かであると判断できます」

声は唐突に頭の中に響いてきた。それが誰の声なのかは全くわからない。

ただ、いやに落ち着いた澄んだ声に、私は吐き気を覚えた。

「そんな子供は大抵の場合、心の中の存在というものを信じています」

声は、淡々とそんなことを言った。

私に言わせてみれば、それはひどい偏見だ。

「その子が特別だという意味ではありません。無論、精神的な病だということでもありません」

男というほどに低いわけでもなく、女だと思えるほどに高い声でもない。

非常に微妙な境界線を彷徨う声がただ続ける。

「人というものは、多少なりとも誰でも自分ともう一人の存在を抱いているものです」

ある意味で他人を見下しているような印象を与えるその声。

苛々と胸のむかつきまで与えてくれる。

「しかし、精神の成長が不十分だった場合にはそれが現実逃避の手段ともなります」

そいつは誰に向かっているのかもわからない。

誰に対してその言葉を吐いているのかわからない。

「精神病であると認識されるまでに至らなかったとしても、それは酷い場合にはひとつの世界を作り出してしまいます」

そいつは、ただ一人で喋り続けている。

誰についての話なのか、わからない。

「そして、その中で二人の『自分』を演じ、その中で全てを完結さ

せてしまう事もあります」

とても気分が悪い。

言葉ひとつひとつをただ聞いているだけだというのに、吐瀉物でも飲まされている気分になる。

吐き出した何かをまた飲まされるような。

「本人がそのことに気付きにくいというのが厄介なところです」

あれ？ 吐き出した、何か？

何かを”戻す”？

「強く突き付けてしまえば拒絶のあまり更にひどくなってしまう
す」

気持ち悪い。

何か、いらぬモノを飲み込んだ感じ。

「過去の経験や妄想、そして記憶に基づく世界に溺れた場合、本人が気付く事はまずありません」

煩い。もう、そろそろ、聞きたくない。

聞きたくないのにその声は、全く止まらない。

「非常に稀なケースですが悪化した場合に自らが作り出した人格に飲み込まれてしまうという結果にもなります」

優しくないその声は、ただ続く。

誰かもわからないのにそれは聞こえる。

気持ち悪いのに、煩いのに、聞きたくないのに、それは止まらない。

「それを私達は『死』と結論付けました。精神的な死は、肉体的に生きていた場合にも『死』である」と

淡々としたそいつの声がそう紡いだ瞬間、私は気づいた。

どうして視界が暗闇に支配されているのかわからない。

「幼い頃に強いショックを受けた精神がその後どうなっていくのか
についての興味そのものは殺がれました」

声は、ただ言い続ける。

そこに誰が存在していても、誰が存在していなくともそれは同じなのかもしれない。

「貴方はそろそろ解放されてもいいという結論が出ました。もうこれで終わりにしましょう」

何を言っているのかわからない。

此処が何処なのかわからない。

一体、何がどうなっているのか。

「御休み下さい。心地の良い眠りをお約束しましょう」

最後の聞こえたその声は、とても遠くから響いてきたような気がした。

そんな気がただけで、実際は近くだったのかもしれない。

ただ、もう何もかもどうでもよくなった。

獣心19

獣よ

望めばいいだろう

喰いたいだけ喰い散らせ

望みは叶える

お前は

自由だ

『いい具合に壊れたな……』

また、何処からか聞こえてくる声。

それはなんだかとても楽しげで、私にとってはかなり不愉快な声。声は、空気を震わせている音じゃなく、直接耳に入ってくるような音。

私は眠っている筈なのに、それは夢ではないとはっきりとわかる。

こいつは、私のすぐ傍にいて笑っているんだと。

吐息が耳にかかるような感覚と共に、声は静かに近づいてきた。

足音なんかはなく、ただそれは風のように寄ってくる。

姿は見えない。視界は全てを闇に支配されていて、視力は全て奪われている。

そいつは、私の頬を冷たい手で撫でた。

まるで人形でも愛でているようなその手の動きに、私は抵抗しなかった。

抵抗など、しようとは思わなかった。

その手は人のものではないと感じるほどに、冷たくて機械的なものだった。

人工的に生み出された人間の紛い物。例えるのならば、そういうものの。

流石にそんなものは見た事がないし、こうやって触られたことなどない。

だけど、その手は何とも言い難い。

生き物じゃない、と言えはいいのだろうかそいつは喉で笑っているかのような音を出しながら、私の手を取った。

それは、少しおかしいな表現かもしれない。私は、今、自分の体をそれとして認識できていない。

どこに手があって、どこに脚があるのか。もしかしたら、そんなものは最初からなくてただそう感じただけかもしれない。

『死の舞いを踊れ……』

声は、言葉を紡ぎ始めた。

私はそれをぼんやりと聞くだけで、反応などしない。寧ろ、出来ないと言った方が正しいのかもしれない。

”私”という存在は”今”いないのだから。それは続ける。

『死を待つ孤独な人形よ……』

なんの声だかわからない。

男なのか、女なのかさえわからない声。

『血を纏って鼓動を消す如く舞い続けるがいい……』

淡々と、まるでインプットされた台詞を続けるコンピューターのよう
に言い続ける。

『終わることのないステップから、逃れる術を持たない哀れな人形
よ……』

その声が響く中、吐息と共に私の唇がゆっくりと塞がれた。

私が、自分の唇だと認識している場所を柔らかいモノで。

腕を握っていたかと思っていたその手の手は、いつの間にか私の髪を
握っていて。

乱暴に抱き寄せると、荒々しく行為が続いた。

噛み付くような勢いでその舌が私の口を舐め尽くし、ゆっくり
と離れていく。

それは、長く続いたようでとても短く。

数十分かとも思ったが、実は一瞬のよう。

ただそれだけのことだというのに。

それは、そいつは私から全てを吸い取っていったように思えた。

『死霊を連れてただ舞えればいい……』

離れると同時に言い放たれた言葉は、消えることなく暫く耳に残っ
た。

体全体が浮くような感覚のあと、全ての呪縛は消えた。

私という全てがまるで風にでもなかったかのよう。

『……もう終わりだ。これで「最期」だ。さあ、舞い続けろ。死に
堕ちた哀れな人形よ……』

この声は、私を包んだように見せかけて私を何処かへと閉じ込めた。何もない空間には慣れている。

だけど、そこには”私”すらない。

もう光を見る事はないのだと感じた瞬間、私は声を上げた。

上げたはず、なのに。

私の声は、音して発せられることはなく、ただ消えていってしまった。

風も音も光も感覚も、何もない。

目を失えば、光を見なくなる。

耳を削いでしまえば、音は消える。

脚を千切れば、動かなくていい。

腕を切り落とせば、捕まれることはない。

口を塞げば、声を出すこともなくなる。

冷たく響いてたあの声は、もういない。

私の頬を撫でようもしないし、手を取ろうもしない。

ああ、違う。

そんな問題じゃない。

”私”が消えてしまえば、触れるモノなんかない。

全てが終わったというのは、私が終わっただけの話。

私が終わったところで、他人は生き続ける。

誰が死んだところで世界に支障はない。

誰が生まれたところで誰の得にもならないように。

いつ、誰が、何処で、どうやって死のうが人々には無関係なんだ。

殺してよ……。

この言葉は、誰にも届かない。

此処には誰もいないのだから。

どうして死なせてくれないの……。

涙も出ない。

私にはそんな瞳はないから。

早く殺してよ……。

そこで思い出す。

そうだ、声は言っていたじゃないか。

『舞い続ける』と。

だから、私は死んだって止まらないんだ。

全てから解放され、全てから見放され、全てから除外されていながら。

私は、止まらないんだ。

ああ……だから、『哀れな人形』なんだ。

奪われたのは私の『命』だったんだ。

吸い取られたのは、それだったんだ。

あってもなくても、私は何もしていなかったから。

私は生きてても死んでもこうやってやっていることは一緒だから。つまり、私は世界から捨てられたわけだ。

此処でずっと舞い続けろと。

ああ、だからか……だから、ああ……だから……――――

死にゆく獣に何も無し
悲しむ涙もなく
嘆く声も持ちはしない
残るのは
喰い散らかした肉の欠片と
消えていった命の残像

獸心20 (前書き)

The beast eats meat to live.

どこかで誰かが死ねば、どこかで誰かが生まれる。

誰かが生きる中で、誰かが死んでいく。

生まれた時に祝福を受けるように、死ねば誰かに追悼される。

死ぬからこそ生まれることに意味があるのだと、誰かが言った。

愛されるために人は生きるのだと、誰かが言った。

生きることが忘れたときに人は死ぬのだと、誰かが言った。

何にしろ、いつかは死ぬと言いたいのだと誰かが結論付けた。

生まれてきた子を愛してあげて下さい。

生きようとする人を助けてあげて下さい。

貴方の愛を与えてあげて下さい。

貴方の手を差し伸べて下さい。

いつか、誰かがそう言った。

「不可解だと決め付け、それを理解しようとしなないことは勿体無い事だと思えます」

白衣を纏った長身の医者らしき人物が一人、とある建物の屋上に立っていた。

眼鏡の奥に見えるその双眸に感情らしきものは全く見えない。

白衣のポケットに突っ込まれたままの両腕が動く気配はなく、銜えたままの煙草の灰もどうにかする気はないらしい。

「そもそも全てが理解しやすいものだと思っている時点でそれこそ理解し難いことだとは思います」

吐かれる言葉達を聞く者はいない。

周囲には誰もおらず、白いペンキがところどころ剥げた鉄の柵だけがただ突っ立っている。

「面白い事に、この世には理解し難い事が多々あります。ただ、理解できない事はありません」

断言するようにはつきりと言う。

「理解したくないと逃げることや、それを伴う行為はその限りではありませんが」

言いながら見上げたその視線の先に、一人の青年が立っていた。

いや、立っているという表現はおかしい。彼が立っている場所は、通常では風の通り道でしかないのだ。

光を遮り、影をつくることもない身体。

だが、それは見る限り其処に『立って』いるのだ。

「そうでしょう？」

彼を見て、微かに微笑んでみせる白衣の者。

口元では笑ってはいるが、その瞳は研ぎ澄まれた刃のような光を宿

したままである。

『……俺は闇だ』

「闇とは即ち人の心という事です」

直接、脳内に響くような彼の声にも動じる様子は一切見られない。ただ白衣を風に揺らしながら、何をするでもなくそこに立っている。

『……俺は……』

「存在についての思考は非常に楽しいものです。しかし、同時に解決できない不快なものでもあります」

『……もういい。俺の人形は仕上がった。次の玩具が欲しい』

「いいでしょう」

まるで親子のやり取りのようにさえ見える光景。

いや、内容そのものは異常しかなく、ただ常軌を逸したものでしかない。

「ただ、長持ちする器かどうかはわかりません」

そんな言葉を吐くと、その影はふと別の影へと紛れた。

ただ単に、建物の中に入っていったのだが、彼はそんなことを見ていなかった。

そして、一人になった彼も静かに姿を消した。

今にも剥がれ落ちてしまいそうなほどに老朽化した壁。

歩くほどに軋む廊下や、叩けば簡単に割れてしまうであろう硝子窓。そこを通る白衣の姿は誰も見ていない。

すぐ隣には真新しい新病棟があり、そこには何人もの患者が入院している。

勿論、この旧病棟にも未だ患者は残っている。

移すには危険な部屋から出せない者ばかりであり、大抵家族はおらず天涯孤独。

「さて、今回は何がいいでしょう」

淡々とそう言うと、白衣を纏った影はゆっくりと一つの病室の前で止まった。

そこには、まだ新しい名前が刻まれたプレートがただ一つ貼り付け

てある。

口元で微笑み、そこに入っていったその影は暫く出てくることはなかった。

何より奇妙なのは、数時間もの間に物音が一切しないということ。

ただ、誰かが何かを囁くような声が延々と聞こえる。

数時間後、その影は誰を連れるでもなく静かに外に出てきた。

銜えていた煙草は既になく、両の腕はポケットに突っ込まれたまま。白衣を翻しながら歩くその影は、裏の駐車場に出ると静かに言い放った。

「どうぞ。貴方に退屈な思いなどさせません」

その後続く言葉は何もない。

誰が来るでもない使われなくなったその駐車場で数十分の間、空を見上げていたその影は静かに微笑んで再び建物へと姿を消した。

あとに残ったのは、掠れて読めなくなった精神病院の看板と小さなプレートだけ。

人を喰らい続けた獣は

いつしか闇に己が喰われていた事にも気付かず

ただ闇の中に落ちた時

ようやく己の最期を知った

獣心20（後書き）

ここまで読んで頂きまして、ありがとうございました。

今回はちよつといつもと書き方を変えてみました。

一つ一つは非常に短い話でしたが、これにて連載終了です。

ホラーと呼べるほどのものでもなく生温い感じでしたが楽しんでもらえれば幸いです。

さて、生きる事を面倒だと思って生きている主人公だった「私」一体、彼女は最後にどうなってしまったのでしょうか。

人によっては死んだという事になるかもしれませんが。

また、別の見方では、ある意味ただ終わったただけだという話かもしれません。

結果的に彼女がもう表に出る事はありませんが、それでも彼女は終わることが出来ないままであったりします。

では、結局どうなったのか。どうなってしまったのか。それについては、皆様にお任せします。

話は変わりますが、人の心に闇が棲んでいるというのは割りと普通だと思ふ事があります。

光と闇は常に表裏一体で、光がなければ闇は生まれず、闇がなければ光の意味がありません。

人の心が光だとは言いませんが、闇が中にあるというのは否定できないと思います。

ちなみに「私」のモデルになるような人物は存在しません。

人間って、一人ひとりが勝手な世界を作り出して生きてる生き物だと思います。

それは、この「私」のような「異常な世界」でなくてもいい。好き嫌いの基準だとか、そんな小さな事も自分で作り出して生きて

いるじゃないですか。

だからどうしたよという話かもしれませんが、その「自分の世界」というものが

もしも誰に奪われてしまったら。

そうしたら、それでも「自分」だと言えるのでしょうか。

自分が感じる事や思うことも、選ぶ事も全て得体の知れない他人が決めたものだったとしても

それは絶対に「自分」だと思って生きる事が出来るのでしょうか。なんて考えてみたら、ひょっとしてこんな話でもちよっとは怖くなるのかもしれませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3878d/>

彼と私の生き着く道

2010年10月10日00時47分発行